

(様式2)

[成果情報名] アジサイ「月虹」育苗期の生育障害低減対策

[要約] アジサイ「月虹」の育苗期に発生する葉の障害(萎縮症状)は、障害のない親株から採穂することで発生を軽減できる。かん水間隔と微量要素施用が障害発生に及ぼす影響は認められない。

[キーワード] アジサイ、「月虹」、生育障害、親株、かん水間隔、微量要素

[担当部署] 苗木・花き部;花きチーム

[連絡先] 0943-72-2243

[対象項目] 花木・緑化木

[専門項目] 栽培

[成果分類] 技術改良

[背景・ねらい]

本県におけるアジサイ「月虹」生産では、育苗期の側枝の葉が萎縮する障害が問題となっている(図1)。育苗期に障害株となった苗は、開花期には花房数の減少や花房が奇形化する等、品質が大きく低下することから対策技術の確立が必要である。

この障害は7月から9月に多く発生することから夏季の高温に起因すると考えられる。生産現場では遮光条件下においても障害発生が認められており、遮光以外の対策が必要である。既存の施設設備を利用した対策として、かん水方法や他県の知見がある微量要素施用が有効である可能性がある。

そこで、育苗期における障害発生の原因について、かん水間隔及び微量要素施用や親株の障害の有無から検討する。

(要望機関名:久留米普及セ(R3))

[成果の内容・特徴]

1. 正常親株より採穂した苗の障害株率および障害度は、障害親株より採穂した場合に比べて低い(表1)。
2. 障害株率は、育苗期のかん水間隔を変えたり微量要素を定期的に施用しても、差が認められない(表2、3)。

[成果の活用面・留意点]

1. 普及現場における障害対策技術の資料に活用できる。
2. アジサイは冬季に落葉し、4月の採穂時では親株の障害の有無について判断ができないため、前年度の障害未発生株を親株とする。
3. 障害株について、CMV、INSVの検定を実施したが陰性であった。

[具体的データ]



図1 「月虹」育苗期における萎縮症状
(左：正常、右：障害(萎縮))

注) 障害発生株では正常株に比べ、葉が萎縮し硬くなる。

表1 採穂する親株の障害有無が苗の障害発生に及ぼす影響(令和6年度)

試験区	供試株数 (株)	障害株率 (%)	障害度
正常親株	40	2.5	0.8
障害親株	41	78.0	52.9
検定		*	

- 注) 1. 朝1回手かん水し以降はスプリンクラーを用いて9:30~15:30に2分/回、60分間隔で実施。
2. 障害度=(\sum (障害程度別株数×指数)/ (供試株数×3))×100
3. 障害度算出時の指数は、0:障害無発生、1:一部の側枝に障害が発生、2:株全体に軽度な障害が発生、3:株全体に重度な障害が発生、とした。
4. 表中の*はフィッシャーの正確確率検定(5%)で有意差あり。

表2 かん水間隔が障害発生に及ぼす影響(令和5年度)

かん水間隔	供試株数 (株)	障害株率 (%)	障害度
40分	41	2.4	1.6
60分	41	7.3	4.9
120分	38	7.9	3.5
検定		n.s.	

- 注) 1. 朝1回手かん水し、以降はスプリンクラーを用いて9:30~15:30に2分/回実施。1日当たりのかん水回数は40分区:10回、60分区:7回、120分区:4回。
2. 処理は、令和5年6月14日から同年10月中旬まで実施。
3. 障害度の算出方法および指数は表1と同じ。
4. 表中のn.s.はフィッシャーの正確確率検定で有意差なし。

表3 微量元素施用が障害発生に及ぼす影響(令和5年度)

微量元素	供試株数 (株)	障害株率 (%)	障害度
Mo	53	5.7	3.8
B	42	7.1	4.8
Mo+B	54	7.4	4.3
無処理	38	7.9	3.5
検定		n.s.	

- 注) 1. 微量元素施用区はMo:モリブデン酸ナトリウム0.5%液、B:ホウ酸液0.01%、Mo+B:モリブデン酸ナトリウム0.5%液+ホウ酸0.01%液を葉面散布。
2. 処理は、令和5年6月上旬から同年9月下旬の間で10日に1回散布し計12回実施。
3. 障害度算出方法および指数は表1と同じ。
4. 表中のn.s.はフィッシャーの正確確率検定で有意差なし。

[その他]

研究課題名: アジサイ育苗期の生育障害対策技術の開発

予算区分: 経常

研究期間: 令和6年度(令和4~6年度)

研究担当者: 神田倫、池田朱里、安永智希、村井かほり、樋口俊輔、田中裕稔